

原著論文

〈戦争〉と〈平和〉の語られ方
—— 〈平和ガイド〉による沖縄戦の語りを事例として ——

北村 毅*

Narrating War and Peace : Analysis of the Practices of
Peace Guides in Okinawa

Tsuyoshi Kitamura*

(Received : March 31, 2006 ; Accepted : June 14, 2006)

Abstract

In this paper, I analyze the narrative practices of "peace guides" with regard to the description of the Battle of Okinawa. These guides primarily narrate the story of the war in natural caves known as the *Gama*, where thousands of Okinawans and Japanese soldiers were killed during the war. Herein, the phrase "peace guides" is used to refer to individuals who guide tourists, such as students on school trips from the other islands of Japan, who visit Okinawa. In general, students visit war-related sites (known as *Senseki*), such as the *Gama*, where war episodes are narrated by the peace guides. In particular, I focus on the narrative practices in the *Gama*. Most of the peace guides have no personal war experience since they belong to the postwar generations; nevertheless, based on the available testimonies, they talk about these events. In a way, their activities have pioneered the telling of war narratives by postwar generations in Japan. From the perspective of the representation of memory, through fieldwork on peace guides and the narrative practices of individuals who have not experienced war themselves, the findings of this study will prepare us for the coming age when no individuals who experienced war will remain in Japan. (*Waseda Journal of Human Sciences*, 18 (2) : 55-73, 2006)

Key words : war narrative practices, testimony, battle of Okinawa, peace guide, war-related sites

1. はじめに

1-1. 問題意識の所在

1970年代、沖縄戦研究者によって、戦跡の「裏通り」と呼ばれる沖縄本島の戦跡を巡るコースが提起

され、沖縄の言葉で「ガマ」と呼ばれる自然洞窟（鍾乳洞）が、そこに組み入れられた [北村 2004; 2006]。戦跡の「表通り」が、琉球政府そして沖縄県の観光政策に則り、軍人・軍属の戦争体験に基づいた沖縄戦の「公的な記憶」を語る場であったのに

*早稲田大学琉球・沖縄研究所 客員研究員 (*The Institute for Ryukyuan and Okinawan Studies, Waseda University*)

対して、戦跡の「裏通り」は、沖縄住民の戦争体験に基づいた沖縄戦の記憶を語る場であった。以後、ガマは、「沖縄戦の縮図」、「沖縄戦の生き証人」、「沖縄戦の語り部」などと呼ばれ、沖縄戦を語り継ぐ場、「戦争」と「平和」を考える巡礼の地として位置付けられていく。そこは、「沖縄戦追体験」の場として再発見された70年代当時に比べれば、内部環境の整備、地方自治体による管理運営、観光案内所の併設など、観光地化が進んでいる。とはいえ、地上に比べれば、骨片や、武器弾薬の破片、当時の生活用品などの遺物に直に触れることができる場所である。

90年代に入って、東京都の公立高校の国内修学旅行における航空機利用が認可されたのを皮切りに、航空機利用の解禁が相次ぎ¹、戦後50周年に向けてにわかに脚光を浴びつつあった沖縄へ修学旅行生が大挙して押し寄せることになった。そこで、多くの学校が、すでに80年代半ば頃より一部の高校の修学旅行で試みられつつあった、戦跡の「裏通り」を巡る平和学習の形態を採用するようになっていく。2003年度には、沖縄県外から33万5859人〔沖縄県商工労働部観光リゾート局観光企画課編 2004〕の修学旅行生が訪れ、その内の7割に及ぶ約24万人²がガマに入ったのである。

米山リサは、1970年代後半以降、原爆被災者によって行われるようになった、広島における「碑めぐり」を「記憶の迂回／脱・観光 (Mnemonic De-tour)」として論じているが、沖縄における「裏通り」も、米山がいうところの「公式的な歴史の表象を攪乱する空間的实践」、「公式の歴史地図においては想起されるはずのない記憶の場を発現させてゆく証言活動による空間的实践」として捉えることができる〔米山 1996: 7-8〕。戦跡の「表通り」を迂回し、「そこに描かれない記憶の場を刻印」していく作業として、戦跡の「裏通り」の編成の過程を理解することができる。そして、70年代に開拓された新たな戦跡コースを、80年代後半以降、人口に膾炙させる立役者となったのが「平和ガイド」と呼ばれる人々であった。

平和ガイドとは、「本土」から訪れる修学旅行生を主な対象として、戦跡や基地を案内し、平和学習のサポートをする人々ないし実践の総称である。彼らは、未だ遺骨や遺物が残存するガマの中で、1970年代以降に収集された、その場にまつわる膨大な証言

記録に依拠して、そこでどのようなことが起こったのかを語る。平和ガイドは、10代から70代まで様々な世代で構成されているが、その担い手のほとんどは戦後世代であり、これは、非・戦争体験者による沖縄戦の語りの実践なのである。本稿は、戦争体験者ではない平和ガイドが、どのように沖縄戦を語り継ごうとしているのか、という問題意識を出発点とするものである。

1-2. 「表象」という問題領域

ドイツの文化学研究者ヤン・アスマンは、1992年にドイツで刊行された『文化的記憶』(未邦訳)において、「もっとも深刻な犯罪とカストロフの証人たちの世代がいまや死に絶えようとし始めている」と述べ、生存者の戦争体験に依拠した「生きた想起³」が消失せんとしており、文化的想起の形式が問題になっているのがいまなのだ」と論じた。アスマンは、来るべき「証人の死」への不安こそが、1980年代半ば以降(終戦40年を過ぎた頃から)の歴史や記憶についての論争の興隆の「実存的核」なのだという⁴。

そのアスマンの洞察を踏まえ、岩崎稔は、はたして私たちは、そのような時代を迎える準備ができているのかと問いかけた。

もはや証人や証言による記憶の真正性や権威にたよることができず、アーカイヴによって、記念碑によって、映像や書物によって、さらに教育によって産出されるわたしたちの文化的記憶だけが、そうした過去の出来事を名指すような状況に、はたしてわたしたちは準備ができているのだろうか〔岩崎 2002: 279〕。

証言者の死という第二のカストロフ。かろうじて先の戦争を経験しているだろう65歳以上の人口比率は、すでに2割を切っている〔内閣府 2005〕。その日は近い将来に必ずやってくる。本稿では、この岩崎の問いかけを踏まえ、これまで単純に戦争体験の継承の活動と捉えられてきた(戦争を語ること)について再考する。果たして、私たちには「文化的記憶」しか残されていないのだろうか。これまで長い間、戦争体験は風化したと嘆かれ続けてきたが、そもそも体験が風化するとは一体どういうことなのか。戦争の体験は語り継がなければならないとい

う物言いは、誰もが共有する大前提となっているが、それでは、語り継がれたと判定される条件とは何なのだろうか。そもそも戦争を語るとは、アスマンのいう「生きた想起」、つまり当事者性を有する体験者の記憶だけが特権化される領域なのだろうか。継承を至上命題とするのではなく、証言から新たな語りの様式を見出すことはできないだろうか。

以上のような問いを念頭に置きつつ、ガマにおける平和ガイドの沖縄戦の語りの実践を事例として分析する。本稿の分析の対象となる事例は、2003年から2005年にかけて、筆者が沖縄現地に滞在して行った、計8回のフィールドワークに基づいている。調査の概要を記すと、平和ガイドの派遣団体である「沖縄平和ネットワーク」、「沖縄県観光ボランティアガイド友の会」、「那覇市観光課」に所属する、あるいは、いずれの団体にも所属しない、平和ガイドの実践を参与観察し、それらの平和ガイドならびに関係者に聞き取りを行った。加えて、「平和ネットワーク」が主催する一般向けのイベントやシンポジウム、会員にのみ開かれた会合や学習会などへの参加を通して、彼らを平和ガイドたらしめる背景についてのフィールドワークを進めた。ときには、筆者自身が「平和ガイド」となり、「本土」からの修学旅行生を対象として、沖縄戦の語りの現場に「参与」した。この「参与」により、ガイドの現場が抱える方法論的・実践上の問題を、現地のガイドと共有することが可能になったことを付記しておこう。

本稿では、以上のフィールド調査を通して、他者の言葉である証言を語るとは、そしてそれを語り継ぐとはそもそも一体どういうことなのかを再検討される。つまり、個人的な戦争体験の「継承」ではなく、戦争を体験しない者がいかにして過去を再構成していくか、すなわち、戦争の記憶をどのような形で表象 (representation) するのか、という問題領域を扱う。

平和ガイドについて書かれた断片的な記述は多いが、先行研究は少ない⁵。フィールドワークを試みた上で書かれたものには、ジェラルド・フィガルの研究 [2001] がある。ただし、フィガルの論考は、フィールドデータや1980年代に刊行された戦跡ガイドの教則本をもとに、平和ガイドの実践を概観しているが、その語りの内容や語られ方までには深く踏み込んでいない。

ところで、米山リサによる広島市の被爆の「証言者」(「語り部」) についての一連の研究 [1996; 2005 (1999)] は、「一般に〈証言活動〉と言及されているこの語りの実践が、今日の日本社会の知の政治にどのような位置を占めているのか」[米山1996: 5] という視座において、本稿の議論と軌を一にする。既述の通り、沖縄の平和ガイドは、ほとんどが戦争体験を持たない者による実践であり、体験者による、狭い意味での「証言活動」には当たらない。広島市の状況と正確に対置するためには、おそらく、元ひめゆり学徒の「語り部」の証言活動などと比較検討するのが適当であろう。例えば、米山が論ずるところの「死者の／ための語り」は、極限状況を生き残った者の「慰霊」や「祈り」の実践として、ひめゆりの証言活動とも通底するところが多い。しかし、ここでの関心は、あくまで、非体験者によって、戦争の記憶がいかに語られるか、ということにある。そして、単純に「戦争体験」の継承活動と捉えられがちな平和ガイドの実践が、複雑な「記憶の政治」(politics of memory) の渦中にあることを明らかにしたい。

2. 「ガマ」という記憶の場

2-1. 「ガマ」というメタファー

ガマは、既述の通り、鍾乳洞や窪みなどの自然洞窟を意味し、沖縄本島南部を主としていたるところに散在している。戦前までそこは、地元住民の水汲みや洗濯の場、遺骨の埋葬場所 (風葬墓)、集落の聖地 (拝所) などとして使われていたが、沖縄戦中、日本軍の陣地壕、野戦病院に転用されることになる。

そしてガマは、沖縄住民にとって米軍の砲弾や爆撃からの避難場所でもあった。しかし、そこは、住民たちにとって安息の場所ではなかった。軍隊と住民が雑居状態になった地下の暗闇の中で、敵として沖縄の人々の前に立ち現れたのは、日本兵(「友軍」)であった。「友軍」は、ガマに立ち入ろうとする(あるいは出て行こうとする)住民に、スパイの嫌疑を掛け、拷問を加え、虐殺した。ガマの中で泣き叫ぶ乳幼児を自らの手で殺めたり、家族に殺害を強制したりした。直接的に殺されないまでも、子どもと共に避難場所を追われた人々は、荒れ狂う砲弾の猛威の中に斃れることとなった。ときには、軍に壕や食

糧を提供しない、軍の意に従わないといった理由で、住民が殺傷されたのである。ここに表したような被虐の戦争体験は、1970年代以降、「沖縄－日本」、「住民（民間人）－軍隊（軍人）」というふたつの対立軸において想起されてきた。

岡真理は、1948年、ユダヤ人軍事組織による村民の虐殺が起きた「デイル・ヤーシン」というエルサレムの近郊にある村の名は、イスラエル人にとっての「アウシュヴィッツ」と同じように、パレスチナ人にとって「パレスチナ人の身に生じた〈出来事〉のメタファーである」[岡 2000: vii] という。まさしく、「ガマ」という場所も沖縄の人々にとって、沖縄戦という戦場で起こった出来事の「メタファー」なのである。そのような場所は、ガマに限ったことではない。日本兵による住民虐殺事件が起こった渡野喜屋にせよ、「集団自決」で多くの住民が犠牲になった座間味島や渡嘉敷島にせよ、それぞれの固有名詞の中に共同体の記憶が塗り込められ、圧縮された媒質なのである。

2-2. 「国民の記憶」の不協和音

戦争中使われたガマは、沖縄本島中南部を中心としてかなりの数に上るが、同時に40人（1クラス）以上の集団が容易に入ることができるガマは、それほど多くはない。ガマの規模はさておき、そこを平和学習の場として活用できるかどうかは、戦中そこにどのような人々がいてそこで何が起こったのかを示す、住民や軍関係者の証言が充実して残されているかどうかにかかっている。石原昌家がいうように、ガマは「証言がなければ、ただの洞窟」とみなされる⁶。しかもその証言は、軍隊の視点に依拠するものではなく、あくまで、住民の視点に依拠するものでなければならない。ガイド派遣団体のひとつ、「沖縄平和ネットワーク」（後述）の会則に「住民の目からみた沖縄戦の実相を伝える」とあるように、沖縄戦のマスター・ナラティブたる軍人主体の語りに対する反措定として、ガマにおける平和ガイドは立ち上げられたからである。ガマの規模という物理的な要件に加え、語るにたる住民証言の存在こそが平和学習の場としての必須要件となるといえよう。以上のような要件を満たすガマは、本島南部を中心に10

現在、最も訪問者数の多いガマは、南城市（旧玉

城村）字糸数にある「アブチラガマ」（糸数壕）である。近年、旧玉城村の管理運営の下、急速に観光地化が進められた同壕は⁷、2003年度、17万6258人の入壕者（大部が修学旅行生）を数えた。その数は、南部戦跡最大の観光地「ひめゆりの塔」に隣する、ひめゆり平和祈念資料館における同年の小中高校生入場者数27万4831人 [ひめゆり平和祈念資料館編 2004: 14] と比べても遜色ない。その意味するところは、ガマを編入して立ち上げられた南部戦跡の「裏通り」が、急速に「表通り」へと再編されつつあるという状況の変化である。

本稿では、平和ガイドの実践の舞台として、アブチラガマと轟の壕を取り上げる（図1参照）。アブチラガマに次いで、平和学習で使われることの多いガマが、「轟の壕」（糸満市字伊敷）である。コウモリが羽を伸ばしたように両翼に伸びた形状のせい、あるいは、多数のコウモリが棲息していたせい、カーブヤマガマ（コウモリガマ）と呼ばれることもある。石原昌家によれば、このガマで起こった出来事をモデルとして、沖縄県平和祈念資料館（以下、新資料館）に展示されている、「避難民・日本兵」とのキャプションが付されたジオラマが作られた。それは、写真1に見られるように、住民に対して日本兵が銃剣を突きつけている構図を呈しており、戦時における沖縄住民と日本兵の関係を形象化したものである。

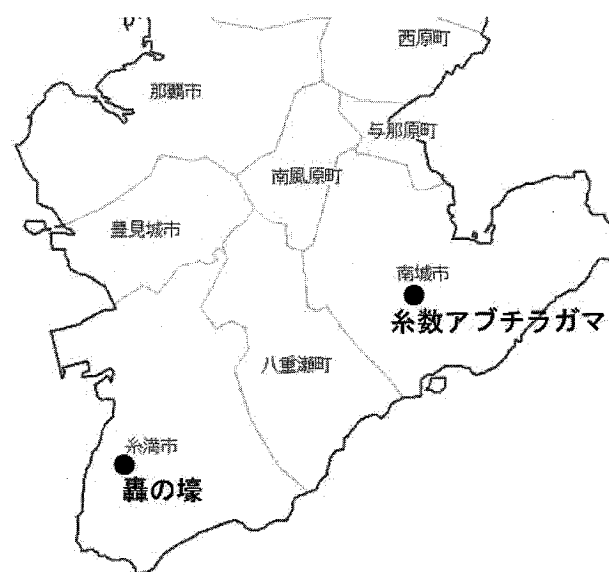


図1：轟の壕と糸数壕の位置 [筆者作成]

1999年、この沖縄戦の記憶の展示を巡って、ある事件が巻き起こった。「沖縄県平和祈念資料館展示改ざん問題」（以下、新資料館問題）である〔新沖縄フォーラム編集運営委員会編 1999；沖縄県歴史教育者協議会編 1999；屋嘉比 2000；石原他（編著）2002〕。

同年8月、翌年に開館を控えた新資料館の展示内容が、県当局によって、監修委員会に無断で変更されつつあることが明らかになった。県の担当者が、展示内容を決める監修委員会の承諾を得ぬまま、当初「ガマでの惨劇」と題されていたジオラマの中で、沖縄住民に対して銃剣を向けて立つ日本兵の模型から、肝心の銃剣が取り外されてしまっていたのである。この展示変更には、前年11月の知事選挙で敗れた大田昌秀の後を継いで、知事になったばかりの稲嶺恵一による「事実ではあるが、あまりに反日的になってはいけない」との発言が左右していたと伝えられる。さらに、暗黙の内に進められつつあった新資料館の展示変更計画には、展示物の用語説明を「虐殺」から「犠牲」へと書き換えたり、随所で「日本兵の残虐性が強調され過ぎないように配慮」したりと、「沖縄は日本の一県にすぎないので、日本全体の展示・記述について考えるように」（県側メモ）との指摘が反映されていた〔松永 2002；大城・石原 2002〕。

同年8月11日付けの『琉球新報』によって報道されてから、県内では、この行政主導の記憶の改変に対して、全県民挙げての批判の声が湧き起こった。屋嘉比収は、同問題に関する岡本恵徳との対談の中で、この一件を、「沖縄側から沖縄戦の認識を変更することで公的な日本国民の戦争の記憶を補完しようとする動き」とであると概括した。岡本が指摘するよ

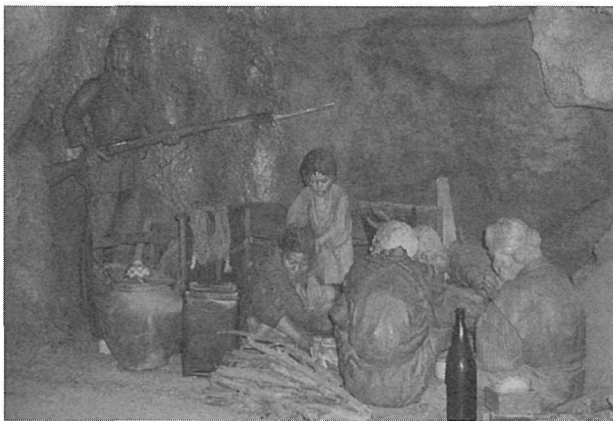


写真1：住民に銃口を向ける日本兵
〔沖縄県平和祈念資料館 2001:83〕

うに、「ガマで銃を持った日本兵が住民を前にしている像が示す意味は重要」であり、日本軍による沖縄住民の虐殺という記憶がある限り、「日本国民の記憶というパブリック・メモリーの中に容易に沖縄戦は包摂」され得ない〔屋嘉比・岡本 1999: 21〕。ガマを巡る記憶は、公共の記憶へと回収可能なひめゆりの「乙女たち」や特攻隊員の「殉国」物語とは対極に位置し、「日本国民」の戦争の記憶の不協和音として鳴り響いているからである。

3. 「平和ガイド」とは何か

3-1. 「平和ガイド」の誕生

沖縄本島中南部の基地・戦跡を案内する人々が、自らを「平和ガイド」と称し、その活動を「平和ガイド」と規定するようになったのは、1980年代後半以降のことである。それまで、「戦跡・基地案内人」、「沖縄戦ガイド」、「反戦ガイド」などと、様々に呼び習わされてきたその活動は、1987年の「沖縄平和ガイドの会」（以下、「平和ガイドの会」）の立ち上げを契機として、「平和ガイド」という名称に一元化されていった。これ以後、1970年代に一部の教師や研究者によって始められた戦跡や基地の案内は、一般市民を担い手とした市民運動として展開していく。

2005年現在、沖縄では、「沖縄平和ネットワーク」（以下、「平和ネットワーク」）、「沖縄県観光ボランティアガイド友の会」（以下、「友の会」）、「那覇市観光課」（以下、「那覇市」）の主要三団体が、「本土」からの修学旅行生を主な対象として、平和ガイドの派遣等の活動を行っている。多くのガイドが、いずれかの団体に属しているとはいえ、個人的に依頼を受けるフリーの平和ガイドも若干いる。

まず、平和ガイドの草創から、現在までの流れを大まかに辿ってみよう。

1986年10月～87年5月にかけて、「県民の一人でも多くの人が平和の語り部になるように」との趣意で、「戦跡・基地ガイド養成講座」が開催された。同講座は、一般市民を対象に呼び掛けられた、県内初めてのガイド養成講座であり、沖縄戦研究者やジャーナリストや語り部（戦争体験）を講師として、沖縄戦や米軍基地に関する座学講座や、戦跡や基地を巡るフィールドワークが催された。

1987年6月、その受講生の内15人が、「沖縄戦の真

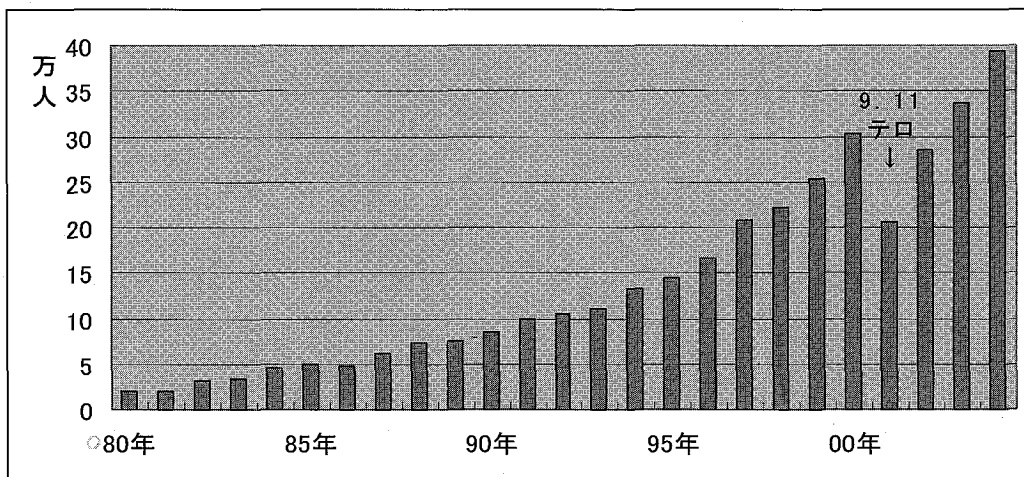


図 2：沖縄への年次別修学旅行入込人数 [沖縄県『観光要覧』より筆者作成]

実の姿、住民から見た実相を伝えよう」との趣旨を掲げ、「平和ガイドの会」を結成する。折しも、1987年は、沖縄への修学旅行入込人数が、6万人を超えた年度であり(図2参照)、戦跡や基地を案内するガイド不足が深刻化し始めた頃だった。県内の研究者や教員、そして運動家が、個人的に依頼を受けてガイドをするという形では、その要望に答えられなくなり、ガイド層の拡充と組織的な対応が求められたのである。

1992年度から、東京都の公立高校の国内修学旅行における航空機利用が認可されたのを皮切りに、航空機利用の解禁が他府県にまで広がっていった。95年には、1都1道1府32県、8政令指定都市の公立高校の飛行機利用が認可され、それと共に、爆発的ともいえる沖縄修学旅行の増加をみることになる。92年には、沖縄を訪れる修学旅行生は、初めて10万人の大台を突破し、97年には20万人、2000年には30万の大台と、修学旅行バブルともいふべき活況を呈した。

このバブルの背景には、第一に90年代以降、「癒しの島」沖縄の音楽や食文化が全国的なブームになったこと、第二に95年9月に報道された「少女暴行事件」に起因する様々な抗議行動、大田昌秀知事の代理署名拒否、「沖縄県民総決起大会」などによって、沖縄が全国的に脚光を浴びたことが大きく作用している。沖縄修学旅行バブルは、2001年の9・11同時テロの影響で、一旦終息したかに見えたが、2003年には回復し、再び急激な上昇カーブを描きつつあることが図2よりみてとれよう。

「平和ネットワーク」の結成は、そのような修学旅

行バブルへの対応を迫られてのことであった。20名程のボランティアが、休日を利用して、有給休暇を取ってやっと稼働する状況では、急激に増え続けるガイドの依頼をこなすしきれなかった。自前でガイドを養成し派遣することのできる団体としての組織化が求められたのである。93年6月より約1年間にわたって、「1フィート運動の会」⁸主催の「93・沖縄平和講座」が開催され、その受講生が合流する形で、94年10月、「沖縄平和ネットワーク」が結成された。「沖縄戦を考える会」(1975年発足)のメンバー(安仁屋政昭、石原昌家、大城将保他)である、沖縄戦研究者を指南役(代表世話人)として、修学旅行バブルに伴い急速に進展しつつあった「平和学習の観光化」の阻止線となるべく、同会は再編されることになった。

同会の平和ガイドの大半は、戦後生まれで、10代から70代まで幅広い世代によって構成されている(平均40代)。その内、約3割が県外出身者である。

平和ネットワークは、「戦争を否定する立場で、沖縄戦の実相を学び、軍事基地の実態をとらえ、伝える。そのために、お互いに学びあい、情報を交換する。沖縄県内外の平和学習を支援し、平和を願う沖縄の心を伝え、平和創造に寄与すること」(会則第3条)をその目的として第一義に掲げるが、一方で、那覇市の平和ガイド派遣事業は、同市の観光振興政策の延長線上に位置付けられよう。

那覇市による平和ガイドの派遣は、観光振興事業の一環として、1995年より始められた。当初は、「那覇市平和と国際交流室」の管轄であったが、2002年4月より、「那覇市観光課」の所轄へと移行し、平和

表1：那覇市修学旅行の受入数と経済効果試算
[那覇市観光課提供資料を筆者一部変更]

項目	単価	2002年度	2003年度
受入学校数		138校	107校
受入人数		22,634人	15,723人
のべ宿泊数		26,189泊	18,258泊
のべバス利用台数		1,954台	1,394台
宿泊費	9,000円	235,701千円	164,322千円
バス借上費(1台)	77,000円	150,458千円	107,338千円
土産代	9,500円	215,023千円	149,369千円
計		601,182千円	421,029千円 ⁹

事業的側面を後景化させ、その観光事業としての側面を前景化させた。

その担い手は、那覇市職員であるため、その勤務時間内（火曜日から金曜日までの9時から17時）のみの派遣である。ガイドは、無償で提供されるが、その代わりとして、依頼者(学校)は、二つの条件(「旅行行程中、最低一泊を那覇市内で宿泊」、「那覇市内に本社のあるバス会社の利用」)を満たすことを求められる。那覇市観光課によれば、当事業により、2002年度を例に挙げると(表1参照)、約6億円の「経済波及効果」があったと試算されている。その内訳は、一人あたりの宿泊費の単価を9000円として約2億3500万円、バスのレンタル代を一台77000円として約1億5000万円、那覇市内の国際通り等で9500円のお土産をかうと推定して約2億1500万円となっている。

「友の会」は、沖縄県の観光振興を目的とする「沖

縄県観光コンベンションビューロー」が、1997年2月から3月に実施した、第一期養成講座の参加者を主体として、同年8月に結成された。養成講座は、さらに、第二期(97年11月～98年2月)、第三期(98年10月～99年1月)と続けられ、カリキュラムの8割以上を受講した者に、県知事より認定証が交付された。現在、友の会は、第一期から第三期の養成講座の修了者、50名余りの会員によって構成され、その内、30余名が実働要員として、南部戦跡を中心とした平和ガイド活動を行っている。図3に見られる通り、その少ない人数で、2003年度には18万人強の修学旅行生をガマに案内した。戦跡・基地だけでなく、観光地も案内し、戦跡案内においては、「ポイントガイド」と呼ばれるガマのみの案内を主体とする。

対して平和ネットワークは、「乗車ガイド」と呼ばれる平和学習の形態を重視している。これは、ガイ

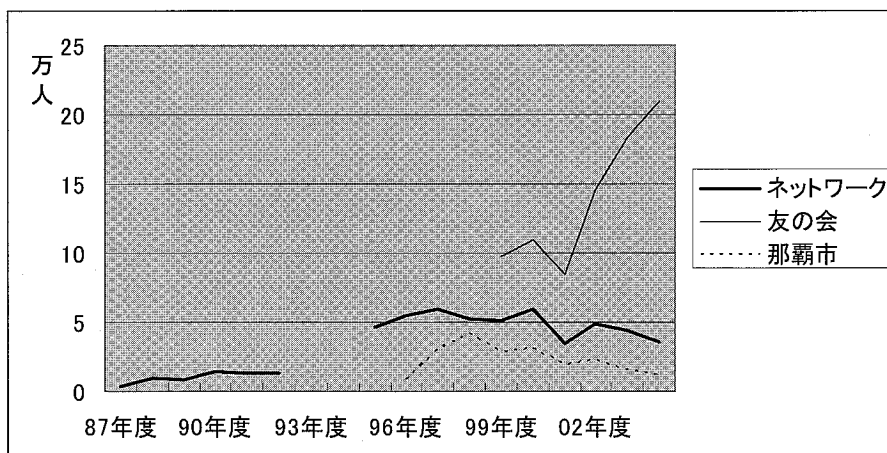


図3：主要3団体のガイド実績 [各団体より提供のデーターを元に筆者作成]
※ネットワークの年度は、10月から翌年9月、他団体は、4月から翌年3月。
※ネットワークは、93・94年度データなし。

ドが修学旅行生に一日同行し、バスガイドと共に¹⁰、沖縄の地理や文化や歴史を含めて、戦跡と基地を案内するものであり、幅広い力量をガイドに要求する。このようなガイド形態は、沖縄修学旅行バブルの流れの中で、多くの修学旅行生を効率よくさばく必要性が生じ、次第に少なくなった。さらに、ツーリスト・添乗員任せの修学旅行が増えるに従って、平和学習において教師や学校の積極的な関わりを求める平和ネットワークは敬遠されるようになっていった。

平和ネットワークが求める、ガマなどのガイドポイントの教師による下見、事前学習への充実した取り組み、ガマに偏らない平和学習コースの設定といった、平和学習の推奨条件は、よほど熱心な教師が修学旅行担当でもない限り望めないものとなっている。それでも、2004年度に平和ネットワークがガイドを派遣した233団体の内、およそ三分の一の80校が乗車ガイドを希望した¹¹。以上のようなガイド形態を優先するため、図3にある通り、90年代後半以降、平和ネットワークのガイド実績は増加することなく、一定数を保って推移している。

公的機関主催の平和ガイド養成講座は、大田県政から稲嶺県政への移行に伴う平和行政の縮小よりしばらく途絶していたが、2004年7月から12月にかけて、「学校及び地域における平和学習支援活動の中核となる人材を確保するため」、沖縄県平和祈念資料館主催で「ボランティア養成講座」が開催された。戦争体験者の講話や沖縄戦研究者の講義、さらには「ガマ・戦跡めぐり」等のフィールドワークも何度か行われ、最後にレポートを提出した受講者に修了証が交付された。

平和ネットワークも、2003年以降、一般市民を対象としたガイド養成講座を毎年実施している。2003年には、研究者、運動家、弁護士、戦争体験者、芸能関係者など、多様な講師陣を配して、沖縄戦と沖縄を多角的に学ぶための全23回の連続講座「なんくる学校」、2004年には、テーマを戦跡と基地に絞った全10回の「平和ガイドなんくるセミナー」、そして2005年には、「戦後」の沖縄の問題を取り上げるフィールドワーク「〈戦後60年企画〉なんくるフィールド塾・沖縄戦後闘争史～いま、平和の原点に学ぶ～」を開催した。

2004年2月15日、「平和ガイドなんくるセミナー」の初回イベントとして、「平和ガイドって何だろう」

をテーマに、県内外から招かれた6人のパネラーによるパネル・ディスカッションが行われ、それぞれが平和ガイドという言葉と取り組んできた経緯が語られた。パネラーの中には、長野県の松代大本営の保存をすすめる会の縣重夫代表もおり、沖縄から波及していった平和ガイドという戦争の語りの様式が、それぞれの地域のコンテクストに根ざして新たな意味を獲得していることを示した。そもそも同会は、1985年に沖縄を修学旅行に訪れ、ガマを体験してショックを受けた長野県の篠ノ井旭高校の生徒が、地元の松代大本営地下壕に目を向け保存を訴えたことを発端として結成されたものである。このとき生徒たちをガマへと案内したのが、戦跡の「裏通り」の開拓者である大城将保であった。

3-2. 「平和ガイド」概念の拡張

平和ネットワークのホームページには、平和ガイドについて次のようにある。

平和ガイドとは、特別の定義があるわけではありません。戦争の被害者にも加害者にもならないと決意した戦後日本で、平和の創造に努力し、行動していく人々はすべて「平和ガイド」です。

この定義に示されている通り、「平和ガイド」とは、常に日々構築されていく未定義概念である。「平和ガイド」としてのアイデンティティは、彼らが沖縄の過去（沖縄戦）と現在（基地）について語ることを通して、すなわち「平和」を実践することで行為遂行的に作りあげられていく。彼らは、第3節と第4節において検証される日々のたゆまぬ実践の中で、「平和の創造」に寄与することを通して、「平和ガイド」として主体化されていくのである。「平和ガイド」とはこのようなものであるといったように、一概に陳述的に述べられるものは何もない。

後述するように、戦争を語ることによって、「平和」が「ガイド」される語りの領域とは、まさに平和ガイド個々人の発話の位置、つまりポジショナリティの問題なのである。平和ネットワークのガイドの中には、その自らの語りの位置を「平和を語るとは、自分を語る」という言葉に体现させる者も多い。「平和」を語るという位相が、彼らを「平和ガイド」たらしめていくのであり、逆に言えば、彼らの日々

の実践が、「平和」を語る領域を構築していく。決して、「平和ガイド」という枠が、ア・プリオリに彼らの語りの在り方を規定するのではないのである。

現平和ネットワーク事務局長の儀間泰典（仮名）は、平和ガイドを始めたきっかけや、平和ガイドになった動機を聞き取材者の語り口に閉口してきたという。儀間は、人は常に「作られていく」のであって、「原点はすべてではない」と語る。平和ガイドは、実践する中で自らを平和ガイドとして作り上げていくのであって、その過程において、平和ガイド自体も作られる。ゆえに、「平和ガイドとは何か」という問いかけに対して答えを提示することに意味はないのであって、その問いかけの中に晒され続ける存在として、常に進行中の存在として平和ガイドを問い続けることこそが肝要であると、儀間は教えてくれた¹²。

ガイドというと、バスガイドのように、画一化されたマニュアルを読み上げるだけの案内人が想像されるが、平和ガイドはマニュアルを持たない。ガマを中心とした戦跡で、沖縄戦について語るだけでなく、基地問題、政治情勢、私的な体験や平和への思いなどについて、幅広く言及する。その語り口は各人各様であり、一人のガイドにおいても日々変化し続けている。いわば、平和ガイドは、沖縄戦という「過去」を素材にして語りながら、「現在」について語っているのである。

作家の下嶋哲朗と共に、地域で38年間もタブーとされてきた、読谷村の「チビチリガマ」の「集団自決」を明るみに出した知花昌一は、自らを平和ガイドと定義することはないにせよ、同ガマにおいて長年「集団自決」について語ってきた。知花は自らの活動を、次のように位置付けている。「私がいかに多くの遺族、体験者の話を聞き、彼らの気持に近づいていったとしても、私が話す事は伝聞証拠であり、証拠能力は弱くなる。それはしかたがない事であり、その弱い部分をおぎなうのは現在の視点だと思う。私達案内人、語り部は過去の語り部ではない。現在生きている、現在の語り部なのである」[知花他2001: 68]。平和ガイドもまた、そのような「現在の語り部」として、「現在の視点」から沖縄戦について語る人々であるということができよう。それは、証言者（体験者）の死という「第二のカタストロフ」以後の、非・戦争体験者を担い手とした、戦争の語

りの方向性を指し示すものなのである。

平和ガイドのパイオニアの一人である村上有慶は、平和ガイドと「会社から与えられたシナリオを丸暗記して語りかけるバスガイド」との違いを強調している。そして、平和ガイドの実践に「一人の人間として、平和に生きようとする自分自身を語りかける姿」[村上1990: 227]が反映されていると述べ、沖縄戦に関する知が、常に「この私」という「現在の視点」に依拠するものであることを示した。これまでの戦争体験の継承において「透明な存在」とされてきた語り手、つまり証言の一通過地点に過ぎないとされてきた「私」こそが、常に試されているのである。いま、何を、どのように伝えるのか、その語りの現在性、私性こそ、次に考察されなければならない。

4. 「戦争」と「平和」を語る位置 — 轟の壕

屋嘉比収は、その論考『「沖縄戦」を考える〈位置〉』において、沖縄戦という「その巨塊で冷厳な〈固有性の事実〉」の前で、戦後世代のアナタが一体何を語り得ようかと問いかけ、次のふたつの「沖縄戦」を語るべき「構え」を呈示した[屋嘉比1991: 43]。ひとつは、「戦争の〈普遍性〉を語るのではなく、沖縄戦の〈固有性〉を語ること」である。もうひとつは、「沖縄戦の圧倒的な〈事実〉」に対峙するとき〈一人称〉で語る構えをもつことである。この問いかけはそのまま「平和ガイド」の語りの実践を考える視座となる。

彼らは、自らの戦争体験に立脚する「語り部」ではない。沖縄戦史を客観的・実証的に語ろうとする歴史家でもなければ、単にオリジナルの証言（体験談）に忠実なコピーを「継承」するだけの機械的な仕事として自らの活動を位置付けているわけでもない。いうならば、平和ガイドとは、あるガマの中で起こった出来事の「固有性」に対峙しようとする「構え」そのものである。その「構え」は、「平和ネットワーク」のガイドの基本理念のひとつともなっている、「平和を語るとは、自分を語ること」という言葉にも表れている。それでは、彼らはそのような「固有性」から出発して、何を語ろうとしているのだろうか。ここでは、以上のような観点から、轟の壕におけるガイドの語りを事例として、沖縄戦

を語る「位置」について論じよう。

4-1. 轟の壕の沖縄戦

「轟の壕」(トルシガマ、カーブヤーガマ)は、糸満市(旧三和村内、戦前は真壁村内)の伊敷集落の南西約500メートル、沖縄本島最南端の一角(図1参照)に位置するドリーネ¹³の中にある。そのドリーネの最下層に、人が一人やっと通れるほどの開口部があり、そこから降りていくと戦争中に人々が避難していた鍾乳洞が、左右に広がっている。

1945年6月、轟の壕内は、数百人とも千人以上ともいわれる¹⁴一般住民(地元集落の人々、中南部から避難してきた人々)が米軍の砲火を避け避難していた。さらには、沖縄県庁の最後の所在地として、島田勲知事を始めとして、県庁職員、県警察関係者など、多数の県庁関係者が滞在していた。島田知事が、ここで県庁の行政機構を解散したことから、「最後の県庁壕」とも呼ばれている。さらに、ここは軍隊の待避壕でもあった。5月頃から多数の兵員が入れ替わり立ち替わり出入りし、6月上旬ともなると敗残兵の巣窟となっていたようだ。壕内には、以上の三つに大別できる人々(軍官民)が混在し、6月25日前後¹⁵に米軍によって救出されるまでに、飢餓や日本軍による住民虐待、または米軍の攻撃によって、多くの人々がこの中で命を失った[石原2000]。

石原昌家は、非戦闘員(住民・行政官)と戦闘員が雑居した同ガマを「軍官民同居壕」と呼び、「軍官民共生共死の一体化」という方針に基づいた日本軍が、「『官民』に対して犠牲を強いる存在であることを立証した壕」であると位置付け、戦時における「軍隊と住民の関係」を象徴的に表した壕であると述べている¹⁶。この壕内で起こった日本兵による児童殺害事件は、前述の沖縄県平和祈念資料館のジオラマ展示のモデルにもなっているが、このことから明らかのように、このガマを巡る記憶は沖縄住民の戦争体験のひとつの典型例として表されることが多いのである。

轟の壕のガイドにおいて、最も参照される証言は、安里要江(1920年生まれ)によるものである。安里(旧姓屋宜)は、一家11人で艦砲弾が飛び交う戦場を逃げまどい、途中家族を2名亡くした末、1945年6月11日の夕方、このガマに辿り着いた。安里(屋宜)の家族にとって、このガマは決して安息の場所とは

ならなかった。さらに、この壕の中で9ヶ月になったばかりの長女和子を餓死させ、収容所で夫と長男に先立たれた。安里は、自らの戦争体験を『沖縄戦ある母の記録』[1995]にまとめているが、そこでは轟の壕内での出来事が、和子の死を中心に綴られている。

4-2. 「平和」を「ガイド」するということ

京都府出身の平和ネットワークのガイド、吉田佑(1982年生まれ、仮名)は、2003年11月15日の轟の壕におけるガイド¹⁷で、安里要江の証言に初めて接したときの驚きを次のように語った。

沖縄戦のことについて話をするとき、例えば、日本軍がどうしたとか、アメリカ軍がどうしたとか、いつ始まっていつ終わっただとかいうことをけっこう言ったりするんだけど、決してそれだけでは、語り得ない部分があると思うんですね。それ、何かっていうと、ひとりひとりの人間っていうのが、この戦場の中で、一体どういうふうに逃げていったか、一体どういうふうな体験をしたのか。

ここで吉田は、証言を語るのではなく、証言との出会いについて語ろうとする。「証言」について語るのではなく、安里の証言に触れたことにより、自分が何を感じ、どのように変わっていったのかという自らの「証言の体験」について一人称で語る。つまり吉田は、証言に「この私」の署名を刻印することによって、あくまでも「この私」を経由した、証言することの限界を引き受けようとするのである。そこでは、現在に生きる「この私」のまなざしそのものが、聞き手に無造作に投げ出されている。さらに、吉田の語りは、そのような「証言の体験」によって気づかされた、〈戦後〉という時間意識の中で自明化されている「平和」観に対する異議申し立てへとつながっていく。

[沖縄に来るまでは]ふつうに今日本はずっと平和だと思って、戦争なんて遠い昔の話だと思って、沖縄に来たんですけれど、そしたら沖縄で、こんな話を聞いた。沖縄では、今でも、花火大会をしたときに、苦情が来ることがあるんです。な

んでかという、花火の音が、戦争の時の爆弾の音を思い出させるからです。で、アメリカ軍の飛行機が飛んで、その音を聞いたら、戦争の時を思い出して、もううずくまってふるえちゃう、お年寄りの方もいる。そういうことを知ったときに、戦争って終わっているのかって思ったんですね。終わってないんじゃないの？ 今でも、沖縄って、実際に不発弾がいっぱい見つかります。そういう状況を見たときね、日本は平和だと思ってたけど、沖縄戦だって、まだ終わってないかもしれないって、自分の中にたくさんクエスチョンマークが湧いてきたんです。平和ってなんやねんって。戦争終わったの、本当に。戦争終わったんだったら、なんでこの人たち、まだ苦しまないといけないのかって。

ここでは、沖縄戦は、現在の「平和の不在」^{アレゴリー}の寓意、あるいは、現在の「平和の不在」が、沖縄戦の寓意として示されている。吉田の発話の中には、現在が「平和」であるという戦後社会の共通認識を疑わせる、小さな時限爆弾が幾つも埋め込まれている。吉田の転回は、安里の証言を体験したことによってもたらされたものだ。まさに、安里の証言が持つ寓意性を内在化させた上で、吉田は、自らの語りの内に寓意という気づきの種を撒こうとするのである。それを聞き手が感受するかどうかは、聞き手の〈その後〉に託される。聞き手の多くは、すでに「平和」という言葉の使用法に馴らされている。「戦争の悲惨さ」から、「平和の尊さ」や「命の大切さ」を学ぶという一方通行の回路から逸する方途を見失っている。そのような聞き手に向かって、平和ガイドは、彼らが馴らされてきた平和とは違う「平和」を、聞き手の前途に投げかけようとする。聞き手の「平和」に対する「慣れ」からの解放、それこそが「平和」を「ガイド」する彼らの存在理由^{レゾン・デートル}なのである。

吉田の発言にみたように、平和ガイドの実践は、まさに「平和」とみなされてきた日本の〈戦後〉に対するアンチテーゼとみなすことができる。平和ガイドにとって、「沖縄戦」を語ることの意義は、「戦争」（過去）と「平和」（現在）の対ではなく、「戦争」という「直接的暴力」と私たちの日常を取り巻く「構造的暴力」との連関の中に見出されることが理解できよう [Galtung(ガルトゥング) 1991]。言

い換えれば、それは、戦争の惨禍といった「直接的暴力」のみに膠着するのではなく、沖縄戦を日常意識から延長された「構造的暴力」、つまり現在の問題として捉えることである。平和ガイドが、沖縄戦を素材として語ろうとする「平和」は、単なる「戦争」の反措定としてのそれ（すなわち「戦争」がない状態）ではない。彼らは、沖縄戦を、日常によって醸成された「構造的暴力」の凝集点として語るのである。例えば、米軍基地の集中などによって示される「構造的暴力」を沖縄戦の帰結として語ることによって、「過去」と「現在」の乖離をパフォーマンスに解消しようとしていると理解できる。換言すれば、彼らは、今そこにある「平和」を陳述的に語っているのではなく、語り続けることによって今そこにはない「平和」を実践的に創り出そうとしているのである。

5. 痕跡を語る、痕跡に語らせる — アブチラガマ

岡真理は、『記憶／物語』において、レバノンのパレスチナ難民キャンプで起こった虐殺事件のルポルタージュである、ジャン・ジュネの「シャティエラの4時間」を取り上げ、「〈出来事〉の痕跡」の存在に気付くためには、「ご覧なさい」という「他者の声」に仲介されなければならない、目撃者の「徹底的な受動性」について論じている。ジュネは、案内者と共に、虐殺事件の3日後にその現場となったキャンプに入り、惨たらしい死体を多数目撃する。彼女がその前で足を止めた、「蠅でまっ黒な開いた口を見せ」た女性の死体。その死体に加えられた暴力の痕跡を、案内者は「ご覧なさい。ほら、この人の手をご覧なさい」と指し示す。

私は気づいていなかった。両手の指が扇状に開かれ、そして十本とも植木鋏のようなものでたち切られていた。(略) / 「ご覧なさい、ほら」 / 指の先端、爪節が、爪と一緒に埃のなかにあった。若者は死者たちの受けた責苦をごく自然に、まったく淡々と示していた [岡 2000: 96]。

ジュネは、その死者のまっ黒な口に気を取られ、死体に刻み込まれた暴力の傷跡(痕跡)をとりこぼすところだった。そこに、「ご覧なさい」という「他

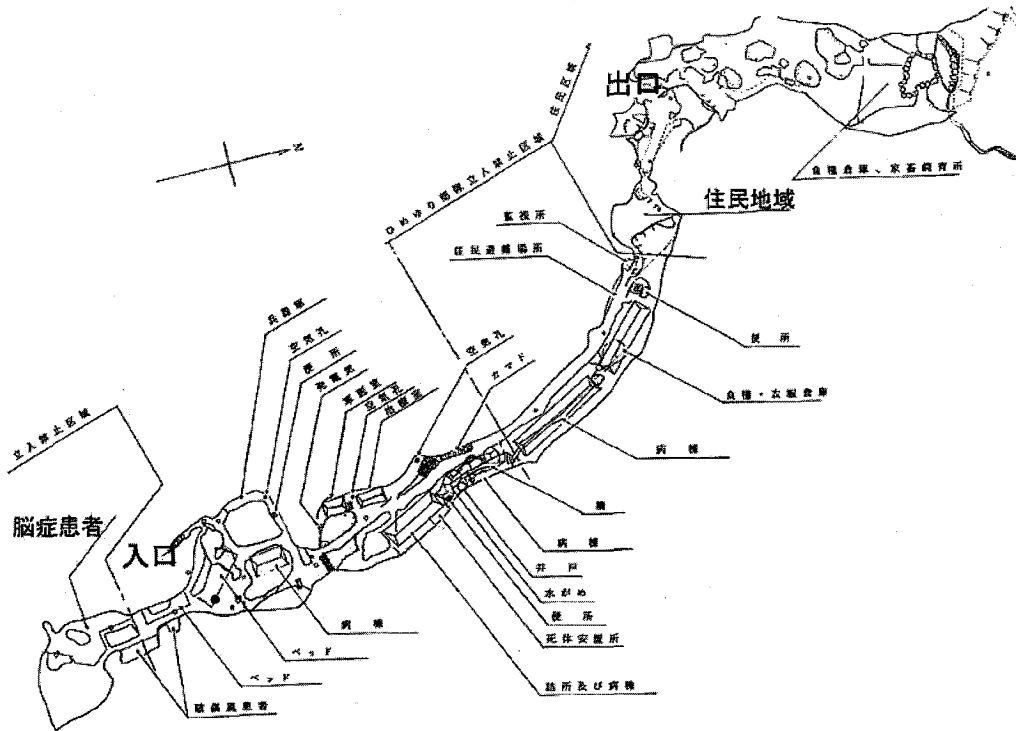


図 4：アブチラガマ平面図 [玉城村刊行の『糸数アブチラガマ』所収の平面図より、筆者修整]
 ※「入口」は、現在の場所である。

者の声」がふりかかる。これと同じように、ガマを訪れた者は、平和ガイドによって、ガマの中で住民がこうむった暴力の痕跡を指し示される。聞き手は、ガイドによって「あれを見てください、あれは……」と示されなければ、〈それ＝出来事の痕跡〉の存在には決して気づかない。彼らは示されて初めて、〈それ〉を目撃する。平和ガイドは、ガマの暗闇の中に埋没してしまっている暴力の痕跡への接近方法を提示する、出来事と目撃者を仲介する「他者の声」である。以下、その例をアブチラガマでのガイドにみてみよう。

5-1. 被傷の換喩

アブチラガマ（糸数壕）は、旧玉城村の糸数集落の北端にある、全長270メートルにも及ぶ巨大な自然洞窟である（図4参照）。沖縄戦中、同ガマは、日本軍の陣地壕や食糧倉庫、病院壕、住民の避難壕と様々に使用され、証言も数多い。内部には地下水脈も露出しており、その広大な空間内に兵舎や茅葺き木造二階建ての慰安所まで建設されていた。すでに撤去されているものも多いが、遺物や遺品、石垣、井戸、カマドなど戦争の痕跡に手軽に触れることができるため、今では年間20万人近くが訪れる「観光地」となっている。

その現在の出口の近くの天井に、錆びついた金属片が、石灰岩の岩肌をめり込むようにして、貼り付いている（写真2参照）。これは、1945年6月上旬に始まった米軍の「馬乗り攻撃」¹⁸によって、吹き飛ばされたタン（一斗缶、ドラム缶）といわれている。その附近の天井には、他にも米軍の攻撃の痕跡が残されている。米軍の攻撃（爆風か火炎放射）によって、石灰岩の岩肌はまっ黒に焼け焦げ、一方で剥離した鍾乳石の跡が白く浮き上がって見える部分がある（写真3参照）。白と黒のコントラストが痛々しい。これは何の、いや誰の傷跡だろうか。この攻撃は、どのような暴力の痕跡なのだろうか。このガマで、このガマについて語る者は、この場所にどのような人々がいて、彼らがいかなる状況下にあったかを説明する。ガイドは、懐中電灯で金属片を照らし、〈それ〉をスポットライトの先に浮かび上がらせるのである。「ご覧なさい、ほら」と、〈それ〉を見るように促すのである。実際の例を、いくつか以下に挙げてみよう。

こういうところには、どういう人たちがいたかということ、一般の住民がいた。住民を守るべき兵隊はどこにいたかということ、奥の安全なところに

いたんです。こういう危険な場所に、住民を追い
やったんですね。沖縄には、こういうたくさん
の洞窟壕がありました。投降勧告して出てこない場
合は、爆弾なんかを大量に投げ込む。それでも、
出てこない場合は、どうしたかという、ブルド
ーザーで土を集めてきて入口を生き埋めにするの。
出口の方を見てください。米軍が土砂を流し込
んだ跡が斜めになっています。沖縄には、米軍が土
砂を流し込んで生き埋めにしたところがまだまだ
ある。つまり、地下に潜るとまだ沖縄戦が残っ
ているところがたくさんあるんです。沖縄の県民は、
遺骨と不発弾の上に住んでいることを覚えてお
いてほしい。(平和ネットワーク・普天間義一 [仮
名] のガイド、2003年10月26日)

ここに住民たちが家族ごと、ひっそりと生活
していたことを想像してください。入口のすぐ近く
ですし、一番この壕の中で危険なところ。自
分たちの村の、自分たちの避難壕でありながら、
そこにしかいられなかったというのが、沖縄戦
中の軍隊と住民との関係をよく示しています。そ
ういう場所です。(平和ネットワーク・藤木次朗
[仮名] のガイド、2003年6月25日)

米軍の攻撃が刻み込まれた痕跡の真下には、地元
の糸数集落を中心とした住民たちがいた。沖縄を守
りに来たと主張していた日本兵は、安全なガマの奥
に立てこもって、一方で住民を出入口付近に追いや
り危険に晒したのである。ガマの天井の痕跡は、避



写真2：天井に貼り付いた金属片 [沖縄平和ネットワ
ークホームページより]

難民に加えられた暴力を喚起させる。それは、住民
の被傷(傷跡)の換喩なのである。このただの金属
片や石灰岩の剥離の跡は、ガイドの懐中電灯の先に、
出来事の痕跡として照らし出される。それは米軍と
日本軍というふたつの軍権力によって、沖縄住民に
加えられた暴力の二重性を証すものであるといえよう。
言い換えれば、それは沖縄住民の被傷性=脆弱性¹⁹
を証言するものなのだ。平和ガイドの中は、ガマそ
のものを沖縄戦の「語り部」や「証言者」と呼ぶ者
が多いが、このような痕跡が語りだす固有の場のこ
とを表したメタファーなのである。

例えば、平和ネットワークのガイド、吉川由紀は、
戦跡(戦争遺跡)を「声なき証言者」と位置
付け、「近い将来、この世から戦場体験者が一人もい
ない時代がきたとき、沖縄戦を語りつぐのは体験者
とともに戦場をくぐり抜けてきた、戦争遺跡たちで
ある」と述べる。ガマを始めとした戦争遺跡は、「た
だそこにあるだけでは何も伝えてくれない」が、「遺
跡とそこを訪れる人」の仲介者たる「平和ガイド」
によって、「過去の戦争と今を生きる私たち」がつな
がれる。いたるところに沖縄住民の被傷の痕跡が残
されたガマの中で、平和ガイドは、「(声なき証言者)
である戦争遺跡に〈語らせる〉」役割を担っている
のである [吉川 2003: 101-2]。

5-2. 「脳症患者」の記憶

もちろん、ガマの中に残された被傷の痕跡は、沖
縄住民に関するものだけではない。

1945年4月24日以降、このガマは、映画「ひめゆ

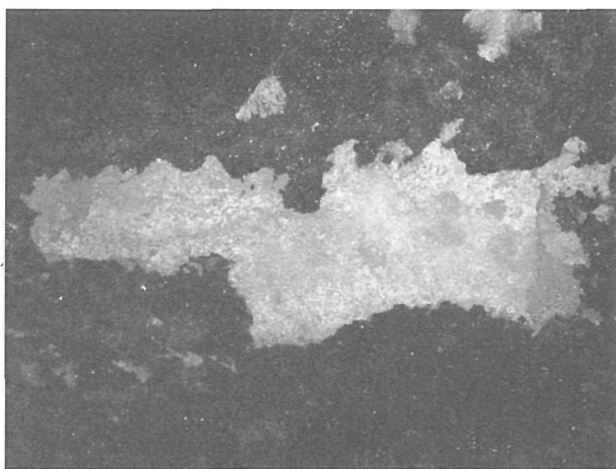


写真3：焼け焦げ、剥離した石灰岩 [沖縄平和ネットワ
ークホームページより]

りの塔」で有名な南風原陸軍病院壕の糸数分室として、病院壕ともなった²⁰。5月1日に、糸数分室に16人のひめゆり学徒とその引率教師1人が配属されている。ここに、激戦地から負傷兵が絶えず運び込まれ、学徒たちは不眠不休で看護や雑務に追われた。最も多い時期で、同ガマは、1000人近くの患者を収容したという。5月25日、分院にも南部への撤退命令が下され、多くの重傷患者が手榴弾や青酸カリを配られて置き去りにされたのである。その後、自決できない傷病兵と敗残兵、そして避難民が雑居することになった。

6月に入って、この辺り一帯を占領した米軍は、ガマ内に立てこもる彼らに対して投降を呼びかけた。しかし、彼らは応じず、米軍の馬乗り攻撃が繰り返された。敗残兵は一般住民が外に出ることも許さず、米軍に投降した住民が中に入ろうとして、敗残兵に射殺される事件も頻発した。そのような軍民雑居の洞窟生活は3ヶ月にも及び、壕内の大多数が投降に応じたのは8月22日にもなってからのことである(9月頃までたてこもっていた日本兵もいる)。

軍民が雑居していたこともあり、この壕には、住民に関する痕跡より、むしろ軍隊に関するものの方が多い。中でも、「脳症患者」が閉じこめられていた場とそれに関する証言が示す痕跡は重要である。「大和魂」という精神主義に彩られた「皇軍」にとって、「逃亡兵」と共にもっとも忌むべきものとして扱われたのが「脳症患者」であった。「脳症患者」とは、極度の緊張を強いられる戦場の中で「戦争神経症」の症状を呈した兵士のことである。彼らが閉塞されていた場所は、この壕の最も奥まったところにあり、彼らは大日本帝国の軍隊の恥部として隠蔽され、消去された。当時の日本の軍医は、その存在を全く無視した。野田正彰がいうように、「報国の集団心理によって死の不安は解消すると単純に考える帝国陸軍から見れば、戦争神経症という概念は余分なものでしかなかった」[野田 1998: 74]。米海軍対日技術調査団が、1945年12月に作成したレポート「医学的対象—日本軍の精神神経症」によれば、日本の軍隊では、「戦闘中の神経疲労と恐怖は理解ある軍医の治療ではなく、兵科将校の厳しい叱責によって処理されてきた」[日本の戦争責任資料センター研究事務局編 2003: 30]のである。そのような「恥ずべき存在」に対して、日本軍はどのように対処したか、彼らの

存在の痕跡を示すひめゆり学徒の証言が残されている。

「衛生兵殿、脳症患者が暴れております！」と叫んだら、すぐに二、三人飛んできて、「キサマ来い！」と言って、奥の方へ連れて行きました。「どこへ連れて行くのですか？」と尋ねても返事してくれませんでした。それ以後、病室の上の段でも下の段でも、暴れ回る患者が出ました。「殺せコイツ！ どこか連れて行け！」と怒鳴り声が飛び交い、そのたびに脳症患者が奥の方へ連れられて行くのが見えるんです。私たちはそこへ行くと言われていたので、そこには入ったことないです。そこへ連れて行かれた脳症患者は戻ってこないの、「脳症患者はどうしているのですか？」と尋ねたら、「大丈夫だ」と(略)答えていました。暴れていた脳症患者はそれっきり姿を見せませんでした」[石原 2000: 71]

「脳症患者」の声は、証言者の声を通してわずかに聞き取れるのみである。このような関係者の証言と、彼らが連れて行かれたとされる場所のみが、我々の前に残された。「脳症患者」だけではなく、前述した通り、このガマには、多くの使い捨てにされた負傷兵が、漆黒の闇と緩慢な死の中に置き去りにされたのである。

5-3. 痕跡としての暗闇

平和ガイドは、上にみたような死者の痕跡を指し示すために、ガマの中の「暗闇」に仲介させようとする。1980年代後半より平和ガイドとして活動してきた上原和子(仮名)は、2003年6月27日の同ガマにおけるガイドで次のように語って、聞き手を「暗闇体験」へと誘った。

5月25日、南部撤退命令が出されたわけです。動ける者は、南へ撤退しろという命令でした。しかし、動けない重症患者たちが200名ほどいたわけですね。毒薬を持たされて置き去りにされていく者、やがてそれを飲んで死んでいく者。飲む力もないままにただ闇を見つめながら横たわっている者たちもいました。聞こえるのは、うめき声。やがてそのうめき声も小さくなっていく。そうやっ

てここで死んでいく人たちがいたんですね。戦場で多くの負傷兵を看取っていった学生たちは言います。誰も「天皇陛下万歳」といっては死んでいかなかった。「もっと生きていたい。もう一度家族に会いたい」と言いながら、亡くなっていったと言います。おそらく、そこに置き去りにされた人たちももっともって生きていたいと思いながら亡くなっていったに違いないと思うんですね。彼らがどんな思いでこの闇の中で、やがて訪れる自分の死と向かいあっていったのか、追体験していきたいと思います。病院が撤退していった後は、ほとんど明かりのささない闇になっていきました。その闇の中で、自分の死と向かいあっていた人たちがいたんですね。聞こえるのはしずくの音。その中で死と向かいあっていきました。では、あかりを全部消してみたいと思います。

このガマには、彼ら日本兵のものと思われる遺骨の細片が、散乱している場所もある。そのような目に見える痕跡をガイドは指し示すだけではない。目の前にあるものだけを「見てください」と聞き手に投げ出すだけではなくて、上原は、聞き手に対して目に見えない痕跡、暗闇という痕跡を見つめるように要請する。この闇の中で聞こえてくる「しずくの音」もまた、ここで死んでいった死者たちの思いへとつながれる痕跡なのである。上原の声もまた、岡真理がいう「他者の声」であろう。「他者の呼びかけに答えることでしか、私たちは、その痕跡に触れることができない」[岡 2000: 97]。

その契機は、「暗闇体験」と呼ばれている。聞き手は、数十秒間から数分間、ただ暗闇という「不可視の痕跡」の中に立ち置かれ、一切の沈黙の中でそれぞれの内面の中でこれまでに聞いたもの、見てきたものを反芻するように迫られるのである。それまでに味わったことのない完全な暗闇に衝撃を受け、感情的な失調状態に陥る修学旅行生も少なくない。その効果は、「暗闇の教育力」と呼ばれ、1980年代初頭に、当時知念高校の教師だった吉浜忍（現沖縄国際大学助教授）によって報告された[吉浜・山川 1982]。ガイドによって、暗闇体験の位置付け・意味付けは様々である。さらに、筆者の観察では、これは聞き手と語り手の協同作業であり、暗闇の中に完全な沈黙が実現することもあれば、暗闇の重圧に耐えきれ

ない生徒たちが、懐中電灯の点消灯を繰り返し、騒がしさの中に、ガイドや引率教師の叱責の音が飛び交うことも多い。

最近では、「暗闇体験」が「目的」と化したガマ体験に対して批判の声も挙がっているが、津多則光によればそれは「手段」に過ぎない。暗闇体験を通して、「何らかの価値」を生起させることこそが重要であると津多はいう。その「価値」とは、懐中電灯を消している間に「一人ひとりが何を感じ、何を考えているか」に依拠するものである²¹。つまりガイドによって、それ以前の時間に指し示された痕跡の蓄積に左右される体験なのである。ガイドという「他者の声」（そこには証言者という「他者の声」が折り重なっている）が、聞き手に届いたとき、次の修学旅行生徒にみられるような反響を私たちは聴き取ることができるだろう。

闇は全てを見ていたのだ。いつくるかもしれない死の恐怖に一日一日の命を指おり数えていた彼らを。泣き叫ぶ赤子をあやす母親を、十分な治療をうけられず息絶えてゆく兵士を。自らの手で己の命を奪う者を。闇はその全てを見ていたのだ。そして闇は記憶しているにちがいない。当時の人々の苦しみ、悲しみ、切なる願いを。／一步、壕に足を踏み入れた瞬間、全身に鳥肌が立った。理由などない。頭ではなく肌が、全身が感じたのだ。事前学習で学び、少しは理解していたつもりでも、意味がない。壕にある空気全てが、全身に語りかけてきた。懐中電灯を消し、真の闇に身を投げ出すと、それは更に強くなった。ここで何があったのか、人々は何を感じ、思い、願ったのか。全てを見てきた闇はなんの言葉も使わず、ただひっそりと無言で語りかけてきた。どんな文献を読むよりも強く、鋭く、そして真っすぐに、心に切り込んできた。(略)／壕の中の闇はもう一つの伝道師なのだ²²。

すべての灯りを消すまでに、平和ガイドという「他者の声」は、どのような人々が、どこで、いかにして死んでいったのか、を今に伝える暴力の痕跡を「ご覧なさい」と指し示す。その後で、ガイドは聞き手を「漆黒の暗闇」へと誘う。聞き手は、今度は何も見えない暗闇を見るように指示される。生者は、暗

闇を媒体として、死者との対話を試みようとする。上の生徒だけではない。聞き手は、様々に無明の暗闇と対峙する。同じ学校の他の生徒たちの感想をみてみよう。

“壕の中の闇が意味するもの”とは彼女たちが少しでも自我を保つために無慈悲な時代が与えた唯一の存在ではないかと思う。

壕の中の暗闇は当時そこにいた人々の戦争に対する恐れの特徴ではないのだろうかと思う。

壕の中の闇は当時から今なお、ずっと続いているものであり、決して過去のものではない。(略)あの闇は私達に静かに戦争の悲惨さやむごさ、無意味さを語りかけ、本当の意味での平和とは何かを問い続け、戦争がけっして過去のものではないことを意味し続けていると思う。

ここには、各人多様な闇との、死者との、戦争との切り結び方がみられる。まさにそこは、富山一郎がいう、「死者の〈かわりに語る〉のではなく、死者とともにある時間性のなかで死者と対話しつづけることにより紡がれる語り」の場、「証言の領域」[富山 1995: 93-4] といえないだろうか。上にみた住民や脳症患者のような死者たちは、「国民の記憶」や「ナショナルな語りに回収しきれない死者であるがゆえに、〈証言の領域〉では生者と死者は実践的関係を取りむすぶ」[富山 1995: 94]。そのような死者の沈黙と協調／共役した場において、表象＝代弁の政治学に巻き込まれない生者と死者の「実践的関係」が実現されるのである。

6. おわりに

上野千鶴子は、鼎談「戦争はどのように語られてきたか」の中で、「記憶を語ることは過去の事実の暴露や告白ではなくて、あくまで現在における語り手と聞き手との間の関係の再構築」であると述べているが[上野他 1999: 54]、この語り手と聞き手という関係性は、体験者(による証言)とそれを語り継ぐ者(平和ガイド)という関係性にそのままなぞらえよう。さらにいえば、平和ガイドを通過した証言

が聞き手(修学旅行生などの聴衆)に送り届けられるとき、そこには、ふたつの声——証言(者)と平和ガイド——がポリフォニックに鳴り響いているのである。別言すれば、「継承」といってすまされやすいこの作業は、語り手Aによって語られた証言が、一字一句違えず聞き手Bへ伝えられて完了といったベルトコンベア一式の作業ではないということだ。そこでは、証言は、語りの原案＝約束ごと^{リテラティブ}に過ぎない。平和ガイドという語りの実践も、証言(「過去」)の単純な繰り返し(語り継ぎ)ではなく、「いま・ここ・私」と切り結んだ上での、証言と平和ガイド、さらにはそこから連綿と連なっていく聞き手との対話なのである。「語り継ぐ」とは、常に現在において紡ぎ出される証言の「語り直し」の輪の連環、つまりは、記憶の異版^{バージョン}の連なりなのだ。

そのことを高橋哲哉[1999: 75-80]は、シェークスピアの『ハムレット』におけるハムレットとホレイシヨウの関係を引き合いに出し、「記憶の『継承』とは、したがって同一者の反復ではありえず、「差異を含んだ反復、ある忘却を含んだ反復」であると述べている。ホレイシヨウが背負った「死者のために、死者にかわって証言する責任」を裏返せば、「どんな証人も、〈死者と同一化する〉という幻想は捨てなければならない」という透徹した訓戒である。証言という痕跡を限りなく他者化してしまう——過去形の内に墮しめる——のではなく、「この私」の位置から、限りなく「現在を問う」ことが求められているのである。それこそが、高橋のいう「記憶の〈継承〉の条件」、言い換えれば、証言を語り継ごうとする者のほとんど唯一といってもよい倫理だろう。次々と戦争体験者が世を去り、ポスト〈沖縄戦〉後とでもいべき時代を迎えつつある現在、戦争の語りの実践は、新しい局面に入ろうとしている。

【付 記】

本稿は、先に発表した博士論文[2006]の第7章を加筆・修正したものである。なお、本論文は、「トヨタ財団2004年度研究助成」(「沖縄戦の語り」にみる平和教育への実践的アプローチ〈ガンマ〉における〈平和ガイド〉の実践を事例として)：助成番号：D04-A-269)に基づく、研究成果の一部である。ここに記して、お礼申し上げます。

- 1 1995年4月までに、全国47都道府県と12政令指定都市の54.2パーセントにおいて、公立高校の国内航空機利用が認可された。さらに、翌年には、その割合が79.7パーセントに増加〔日本修学旅行協会編 2004〕。
- 2 主な平和ガイド派遣団体(「沖縄平和ネットワーク」、「沖縄県観光ボランティアガイド友の会」、「那覇市修学旅行平和学習ガイド」)の2003年度平和ガイド実績より算出したが、あくまでも概数である。「ネットワーク」は中高校生のガイド人数総数(4万5053人)、「友の会」は小中高校生のガイド人数総数(18万672人)を参照したが、この数字には僅かであるとはいえ、沖縄県内の学校による平和学習旅行や、ガマには入らない修学旅行の形態を取ったケース(例えば、基地関係のみ)が含まれている可能性がある。一方、「那覇市」のガイド実績(1万5723人)は、県外からの修学旅行生を対象としたガマの案内に限られるため、これは実数である。しかし、24万人という数字には、上記三団体以外の派遣団体や個人ガイドによるガマの案内、平和ガイドの手を介さずにガマに入るケースなどが一切含まれていないため、あくまでも概数と理解されたい。
- 3 ここでいう「生きた想起」とは、体験者の当事者性を有する記憶を意味する。
- 4 引用部分は、岩崎稔 [2002: 279] のアスマンの引用部分を参考にした。原本は、以下。Assmann, Jan. 1992 *Das kulturelle Gedachtnis: Schrift, Erinnerung und politische Identitat in fruhen Hockkulturen*, Munchen: C.H. Beck.
- 5 近年、平和ガイドを取り上げた研究報告が相次いでいる。2004年12月18日、文部省特定領域科研「資源の分配と共有に関する人類学的総合領域の構築」の山下班(文化資源)と春日班(知識資源)が合同で行った研究会(於九州大学)では、田中雅一が「資源としての沖縄戦：観光ガイドのエイジェンシーをめぐって」と題して報告した。さらに、2005年11月12日の「日本平和学会」(於長崎大学)では、「沖縄の平和ガイドの心理学的考察」と題して杉田明宏による報告があった。
- 6 2004年6月27日に石原昌家を講師として行われたフィールドワーク、「平和ガイドなんくるセミナー：ガマで語る」(沖縄平和ネットワーク主催)における配付資料(石原昌家作成)より。
- 7 玉城村が定めた「糸数アブチラガマ管理条例」により、2003年4月1日より営業時間が設定され、同年7月1日より入壕料の徴収が実施された。同条例第1条によれば、その目的は「恒久平和を希求し平和学習の場に資するとともに、観光の振興を図ること」とある。
- 8 正式名称「子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会」、通称「沖縄戦記録フィルム1フィート運動の会」。1983年12月8日結成。米国立公文書館に保存されている沖縄戦の実写フィルムを買い取り、映像を通して沖縄戦を伝えようとする市民運動。2005年現在、これまでに37時間余りのフィルムを収集。
- 9 経済効果試算の減少は、那覇市のガイド実績の減少に比例している。那覇市観光課の担当者によれば、その理由として、近年の修学旅行の形態の変化(効率化?)が挙げられる。学校側は、多数のクラスを同一時間帯にいくつかのガマに配分することによって、平和学習を短時間の内に効率よく終わらせることを希望するが、アブチラガマのみが案内の対象である那覇市は応えられない。よって、必然的にガイド依頼の減少ということになったようである(2005年11月4日の担当者からのメールより)。
- 10 バスガイドなしで、平和ガイドのみの場合もまれにある。逆に、バスガイドが平和ガイドを兼用するケースも増えつつある。昨今では、「平和バスガイド」の養成が盛んになり、バス会社が自前で「平和ガイド」を抱えるようになった。しかし、そのガイドはあくまでも観光という営利からなされるものであり、ボランティア精神に則った平和ガイドの存在意義がそれではなくなるわけではない。
- 11 「第12回沖縄平和ネットワーク総会」(2005年10月10日)配付資料より。
- 12 2003年3月30日の儀間泰典との会話より。
- 13 カルスト地形の一種であり、石灰岩台地の地表に生ずるすり鉢状の窪地のこと。
- 14 2003年10月19日付の『沖縄タイムス』において、轟の壕から住民が救出される様子を米軍が撮影した記録フィルムが米国立公文書館より発見されたとの報道があった。同記事に拠れば、「600人の民間人を壕から助け出した」とのキャプションが付

されていたという。

- 15 同上『沖縄タイムス』には、轟の壕から民間人が救出されたのは、6月25日午後零時とキャプションが付されていたとある。
- 16 前掲「平和ガイドなんくるセミナー：ガマで語る」配付資料より。
- 17 東京都のS高等学校の修学旅行生を対象として行われた。
- 18 沖縄戦において、日本軍の地下陣地や住民（または軍民雑居）の避難壕に対して、米軍が行った攻撃の総称。特に1945年6月に入ると、米軍は、日本兵や避難民が隠れた南部の構築壕やガマの入口を占拠し、黄リン弾、ナパーム弾、手榴弾、ガソリンを詰めたドラム缶などを放擲し、火炎放射を浴びせた。このような米軍の攻撃による直接の死者のみならず、中に閉じこめられた軍民の軋轢による死者もまた記憶されなければならない。
- 19 ここでいうヴァルネラビリティとは、単なる負の意味を表すものではない。「脆弱性」というその負性が、常に正性へと反転する可能性を有する両義的概念である。つまり、戦争を巡る「負の遺産」を、反戦平和思想＝「正の遺産」として語り直す(re-narrative)ための経路なのである。
- 20 以下のアブチラガマに関する記述は、石原昌家[2000]、新崎盛暉他[1997]、糸数アブチラガマ整備委員会編[1995]、沖縄県教育文化資料センター編[2000]、を参照。
- 21 津多則光のホームページより。そこに津多の論考が多数取められている。同サイトは沖縄戦に関する最も充実したインターネット上のデータベースでもある。
(<http://hb4.seikyoku.ne.jp/home/okinawasennokioku/>)
- 22 長野県N高等学校2学年『旅行記』より。

【文献】

- 新崎盛暉他(1997)『第三版 観光コースでない沖縄』高文研。
安里要江(1995)『沖縄戦 ある母の記録』高文研。
知花昌一/高良 勉/藤井貞和(2001)「沖縄社会での沈黙と声 言葉、〈活保存〉、琉球系日本語」(白井隆一郎他編)『シリーズ言語態4 記憶と記録』東京大学出版会、63-81。
Figal, G. (2001) *Waging Peace on Okinawa,*

Critical Asian Studies 33(1): 37-69.

- ガルトウング, J. (1991) 『構造的暴力と平和』(高柳先男他訳) 中央大学出版部。
ひめゆり平和祈念資料館編(2004)『館報』15, ひめゆり平和祈念資料館。
石原昌家(2000)『沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕—国内が戦場になったとき』集英社新書。
石原昌家・大城将保他(編著)(2002)『争点・沖縄戦の記憶』社会評論社。
糸数アブチラガマ整備委員会編(1995)『糸数アブチラガマ(糸数壕)』沖縄県玉城村。
岩崎 稔(2002)「歴史学にとっての記憶と忘却の問題系」(歴史学研究会編)『現代歴史学の成果と課題I 歴史学における方法的転回』歴史学研究会, 279頁。
北村 毅(2004)「沖縄戦跡の〈表通り〉と〈裏通り〉—〈沖縄戦記録／継承運動〉の源流—」『ヒューマンサイエンス リサーチ』13, 早稲田大学大学院人間科学研究科, 51-72。
北村 毅(2006)『〈沖縄戦〉後のエスノグラフィ 痕跡と記憶の戦跡空間』早稲田大学人間科学研究科(博士学位論文)。
松永勝利(2002)「新沖縄県平和祈念資料館問題と報道—取材の現場から」『争点・沖縄戦の記憶』社会評論社, 131-209。
村上有慶(1990)「戦跡・基地ガイドの内容と方法」『平和教育実践選書4 沖縄戦と核基地』桐書房, 209-228。
内閣府(2005)『国民生活白書』内閣府。
日本の戦争責任資料センター研究事務局編(2003)「アメリカ軍ならびに日本軍における戦争神経症についてのレポート」『季刊戦争責任研究』(川島めぐみ訳) 39, 23-31。
日本修学旅行協会編(2004)『修学旅行のすべて』財団法人日本修学旅行協会。
野田正彰(1998)『戦争と罪責』岩波書店。
岡 真理(2000)『記憶／物語』岩波書店。
沖縄県平和祈念資料館(2001)『沖縄県平和祈念資料館 総合案内』沖縄県平和祈念資料館。
沖縄県教育文化資料センター編(2000)『教え・学ぶ—永遠の平和のために—』沖縄県教育文化資料センター。
沖縄県歴史教育者協議会編(1999)『歴史と実践(平

- 和祈念資料館問題特集)』20, 沖縄県歴史教育者協議会.
- 沖縄県商工労働部観光リゾート局観光企画課編 (2004) 『観光要覧 平成15年版』沖縄県.
- 大城将保・石原昌家 (2002) 「監修委員の視点」『争点・沖縄戦の記憶』社会評論社, 255-294.
- 吉川由紀 (2003) 「戦争遺跡と〈平和ガイド〉—〈声なき証言者〉が語りはじめるとき」『戦争遺跡から学ぶ』岩波書店, 101-2.
- 新沖縄フォーラム編集運営委員会編 (1999) 『けーし風 (特集 検証・平和資料館問題)』25, 新沖縄フォーラム刊行会議.
- 高橋哲哉 (1999) 『戦後責任論』講談社.
- 富山一郎 (1995) 『戦場の記憶』日本経済評論社.
- 上野千鶴子・川村 湊・成田龍一 (鼎談) (1999) 「戦争はどのように語られてきたか」『戦争はどのように語られてきたか』朝日新聞社, 17-54.
- 屋嘉比取 (1991) 「〈沖縄戦〉を考える位置」『脈』44, 脈発行所, 43-50.
- 屋嘉比取 (2000) 「ガマが想起する沖縄戦の記憶」『現代思想』28(7), 青土社, 114-125頁.
- 屋嘉比取・岡本恵徳 (対談) (1999) 「資料館問題を開く」『けーし風』(特集=検証・平和資料館問題) 25, 新沖縄フォーラム刊行会議, 18-27.
- 米山リサ (1996) 「記憶の弁証法—広島」『思想』866, 岩波書店, 5-29.
- 米山リサ (2005 [1999]) 『広島 記憶のポリテクス』(小沢弘明他訳) 岩波書店 (Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.)
- 吉浜 忍・山川宗秀 (1982) 「生き方にかかわる沖縄戦学習を」『歴史地理教育』345, 歴史教育者協議, 88-95.